掌編小説（1）

邪推

松島武治

かれこれ一年は交際してきた敬子と別れることになった。小さな会社でＳＥをしている俺の仕事は、時にはデートの約束をすっぽかしたりしたが、それ以外、どちらかに別の恋人ができたとかいうような問題があった訳ではない。しばらく前から敬子は俺の軟弱な性格を非難していた。軟弱というのは、たとえば敬子が「たまにはお酒なんか飲みに行きたいな？」という。俺は「夜の盛り場っていうのはいやだな、俺は」と答える。すると敬子は「ふーん、弱気な人ね」という。そんな意味だと思う。

俺は、別に盛り場などへ行かなくても、たとえば敬子の部屋で飲んでも十分楽しいのに、なぜ彼女はそういうところへ行きたがるのだろうと考えてしまう。

こんなこともあった。久しぶりに映画を見た帰りに散歩していて何となくいい雰囲気になった。俺は意識しながらも、とうとう敬子にキスができな

かった。無理をして嫌われるかもという恐れを感じた。敬子はその時は何も言わなかったが、それから一ヶ月もした頃、今度はデート中をすれ違いの若者たちにからかわれた時、俺が「彼女のいない奴らのやっかみだよな」というと、敬子が「キスもしてないのに、わたしあなたの彼女なの？」といった。

俺はびっくりした。なんだ、してもいいのかと少しあわてて敬子を暗闇に連れ込み、やっとのことで初キスをした。なんと敬子は舌を入れてきた。俺はそんなキスには慣れていなかった（というよりキス自体が初めてだった）。

しばらくして敬子の友人から呼び出しをくらい、敬子が別れたいと言ってることを告げられた、「なんかさあ、あんたといても楽しくないとか、燃えないとか、いってたよ」。

俺は別に自分が弱気な人間だとは考えていなかったが、母も「お前は父さんに似て気が小さいから」などと言うことがあった。その母は父を亡くして以来、幼い俺と妹を女手ひとつで育て上げ、二年前にはその妹も片付けてしまったような気丈な女だった。

妹は兄の贔屓目を差し引いてもなかなかの美人だった。十代の頃から結婚の話が持ち込まれていたが、結局は妹が自分で選んだ男と一緒になった。母は最後まで反対したが、自分に似た性格の娘に押し切られたことが嫌ではなさそうだった。俺の義弟となる男は、色の白い力のあまりなさそうな頼りない感じの若者だった。俺より三つ下というが、もっと年下に見えた。俺はこの男が好きになれな

かった。妹の美しさからもっとましな男が見つかると思っていたせいかも知れない。何だか妹の価値をその男が映し出しているようでいやだった。

母は妹が結婚してまもなく癌がみつかり、床についた。どうしても入院はいやだという母の看護の為、妹はほとんど毎日、実家へ帰って来た。俺は仕事にかこつけてあまり世話をできない（しない）のに、義弟はよく来て、ただ見舞いをいうだけのときもあるが、妹にいわれていそいそと身の回りのものの買い出しに出たりするなど、何かと世話をしてくれた。なんとなく妹がこの男を選んだ気持ちがわかった。母は一年ほど激痛に耐えながらの闘病を続け、最後まで気は確かなまま、旅立った。身内だけの寂しい葬式だったが、何となく充実した印象を受けた。それは明らかに母の生涯の重さから来るものだった。妹はひどく泣いた。自分のわがままが母の死期を早めたということを口にしては手放しで泣いた。俺は妹に同じ気持ちを先に言われたような気がしていた。義弟がそれを慰めている光景を見て、俺にはそんな相方もいないことが身にしみた。

母がいなくなって、妹たちも来なくなった家の中で、俺はさびしいというより、ある種の開放感を味わっていた。むろん、母の死を喜んでいるわけではない。そうではないが、なんとなく肩の上の重しが取れたような身軽さを感じていた。ついでのような気持ちで会社もやめ、しばらくの間、仕事からも解き放たれた自由な気持ちで旅行や映画や飲み歩きなど、一人で好きなことをして過ごした。北

海道でみた場違いなモアイ像に笑い転げたり、好きだったアニメの「聖地巡礼」にもでかけたりした。おかげで少ない貯金はすぐ消えたが、何の後悔もなかった。

敬子から連絡があったのは、母が死んで半年くらい経った頃だ。敬子にはまったく未練がなかったといえば嘘だが、自分から連絡したりする気はなかった。例の友達から俺が会社をやめたと聞いて、心配したのよという。ヒマできたでしょうからまた映画行こうよと言ってきた。

会社をやめた俺に電話をして映画に行こうという敬子が無性に愛おしくなった。俺は「行こ行こ」と二つ返事した。

映画を見て、そのあと初めて俺の実家に来た敬子は、「へー、いいウチね」といいながらお酒を飲んだ。俺たちはやっと一夜を共にした。